

本郷 I 遺跡 2 次調査発掘調査報告書

—大規模商業施設建設に伴う事前発掘調査—

2013年3月

愛媛県西条市教育委員会

序

道前平野の北部に位置する周布地区は、平成 11 年の今治小松自動車道のインターチェンジ開設以降、周辺地域の開発行為が盛んに行われてきた地域です。その結果、多くの埋蔵文化財が地下に眠っていることが確認され、古くは弥生時代から地域の中心地として栄えていたことが明らかとなってまいりました。

今回の発掘調査も、開発行為に伴う事前発掘調査として実施し、その結果、小規模な調査区ではありましたが、古墳時代後期の遺構や遺物を確認しています。

また、開発工事対象範囲の大部分は、工法の変更等により、未調査の状態で見地で保存されています。これも文化財保護に対する成果の一つであります。

これらの成果が、今後、地域の歴史研究や文化財保護の啓発活動に生かされることを願っております。

最後になりましたが、調査に対し、ご理解とご協力を賜りました市民の皆様をはじめ、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

西条市教育委員会

例 言

1. 本書は、西条市教育委員会が平成 24 年度に西条市周布で実施した、本郷 I 遺跡 2 次調査の調査報告書である。
2. 現地発掘調査は、大規模商業施設の建設に伴い、西条市教育委員会が依頼を受け実施した。
3. 現地発掘調査に際しては、地権者ならびに工事関係者の多大なる協力を得た。
4. 本書に使用した座標系は世界測地系であり、方位は座標北を示す。
5. 本書における土層の色調及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』（農林水産省林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
6. 遺物の実測、トレースは渡邊芳貴が行った。
7. 調査で出土した遺物と記録した図面等は、西条市教育委員会で保管している。
8. 本書の執筆及び編集は、渡邊が担当した。

目 次

第1章 遺跡の概要と環境	1
第1節 本郷 I 遺跡の位置	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 本郷 I 遺跡周辺の地理的環境	4
第4節 本郷 I 遺跡周辺の歴史的環境	4
第2章 調査成果	8
第1節 1区	8
第2節 2区	10
第3節 試掘調査出土遺物	12
第3章 総括	15

図・写真・表 目次

図1-1 本郷 I 遺跡位置図1	1	図2-6 2区5層出土遺物	12
図1-2 本郷 I 遺跡位置図2	2	図2-7 2区6層及びSP4 出土遺物	12
図1-3 本郷 I 遺跡位置図3	2	図2-8 試掘調査出土遺物	13
図1-4 本郷 I 遺跡周辺の遺跡	6	写真1-1 1区調査前の状況(東から)	3
図2-1 調査区配置図	8	写真1-2 2区調査前の状況(西から)	3
図2-2 1区平面・断面図	9	写真1-3 2区水没状況	3
図2-3 1区2層出土遺物	10	写真1-4 2区作業風景	3
図2-4 1区4層出土遺物	10	表2-1 遺物観察表	14
図2-5 2区平面・断面図	11		

第1章 遺跡の概要と環境

第1節 本郷I遺跡の位置

本郷I遺跡の絶対位置は、遺跡の中心で北緯33度55分06秒・東経133度04分36秒であり、愛媛県西条市周布746番に所在する(図1-1)。

本郷I遺跡は、愛媛県第2の規模を誇る道前平野の中央に位置する。道前平野は、中山川やその支流及び大明神川などの河川からなる典型的な沖積平野であり、平野中央から北部にかけては古くから人々の活動痕跡が見受けられる。当遺跡は中山川の左岸に位置し、その支流である崩口川に近接する。



図1-1 本郷I遺跡位置図1

第2節 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成24年3月、事業者から西条市教育委員会(以下、「市教委」と記す)に対し大規模商業施設建設計画に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会があり、開発工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「本郷I遺跡」に隣接することが判明した(図1-2)。本郷I遺跡については、平成11年度に財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが今回照会地の北東側を県道拡幅工事に伴い発掘調査を実施し、また平成21年度にファストフード店建設に伴い市教委がその北側を調査した。これらの調査の結果、本郷I遺跡では古墳時代後期から古代にかけての遺構や遺物が確認されていた。しかし、県道の南側に関しては、遺跡がどの程度広がるのか不明確な状態であった。

そこで市教委と事業者とで協議を行い、3月21日に試掘調査を実施した(図1-3)。その結果、工事対象地区北東部に遺跡の広がる可能性の高いことが明らかとなった。この試掘調査結果を踏まえ、事業者と再協議を行い、当初の工法を変更し遺跡を最大限保護できる工法を採用すると共に、やむを得ず遺跡の保護が図れない場所については、その範囲を明確なものとするよう依頼した。その後、文化財保護法第93条に基づき、事業者から平成24年6月15日付けで、「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等届出書」の提出があり、愛媛県教育委員会(以下、「県教委」と記す)に進達を行った。その結果、平成24年6月21日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(指示)」により発掘調査の指示を受け、平成24年7月18日から現地発掘調査を開始した(1区)。

また、現地調査中に、事業者から新たに工事対象地北東隅に看板の設置を検討している旨を伝えられた。予定地は、先の試掘調査で「遺跡の広がる可能性の高い」とされた範囲内にあたることから、十分な保護層を確保できない場合は発掘調査が必要となることを伝えた。しかし、この範囲については工法を変更できないことが明らかとなり、事業者から平成24年8月20日付けで「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等届出書」の提出を受け、翌21日付けで県教委に進達した。これに対し、県教委から8月28日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等について(指示)」により



図 1 - 2 本郷 I 遺跡位置図 2 (S=1/10000)



図 1 - 3 本郷 I 遺跡位置図 3 (S=1/2500)

発掘調査の指示があり、その箇所について9月10日～12日に調査を実施した（2区）。

2 調査の経過

1区：現地調査に先立ち、平成24年7月13日に調査区杭を設置した。

現地調査初日となる7月18日は、重機を用いて表土の剥ぎ取りを実施し、遺物包含層を検出した。これらの作業は、開始30分程度で終了し、その後人力による遺構検出作業を開始した。

調査の結果、調査対象範囲に明確な遺構は存在しなかったものの、4層で古墳時代後期と考えられる土器片を検出した。なお、現代の水田床土層である2層中からは、中世の青磁碗片等が出土している。

現地調査は、7月19日午前に終了し、午後からは室内で出土遺物の洗浄・注記作業を行なった。

2区：2区の調査に際しては、事前に原因者に調査区杭の設置を依頼し、調査開始までに設定を終えていた。

9月10日の調査初日は、1区同様に重機による表土剥ぎを開始した。重機による剥ぎ取りは30分程度で終え、その後は人力により平面精査を繰り返しつつ遺構、遺物の確認を行った。その結果、5層中からは、古墳時代後期～古代にかけての須恵器・土師器片が出土した。しかし、遺構が確認されなかったことからさらに掘り下げを行い、6層を検出した。6層中からも須恵器片等、多量の土器が出土した。その後、遺構の存否確認の途中で初日の作業を終えた。

翌11日は、前夜から未明にかけて降り続いた豪雨の影響で調査区が水没したため、朝一から水抜き作業を実施した。作業は小型水中ポンプと人力で行ったが、調査区周辺からの雨水の流入もあり、この作業に約半日を費やした。水抜き後は、調査区の適度な乾燥を待ち、午後から本来の調査再開となった。まずは調査区内の清掃をしつつ、前日に出土した遺物の確認を行った。遺物が無事元位置を保っていることを確認した後は、遺構の確認作業を再開した。しかし、遺構が確認されなかったことから、慎重に掘り下げを進め7層の一部を検出した段階で2日目の作業を終えた。調査最終日となる12日には、7層検出を完了し、精査を行った結果、調査区北側で5基のピットを確認した。

なお、これらのうちSP3、SP4からは、須恵器片が出



写真1-1 1区調査前の状況（東から）



写真1-2 2区調査前の状況（西から）



写真1-3 2区水没状況（西から）



写真1-4 2区作業風景（南から）

土した。午前中に遺構の掘り下げと記録を完了し、現地調査を終了した。午後からは室内で、出土遺物の洗浄・注記を行った。

3 調査体制

事務局の体制は、以下のとおりである。

役 職	平成 24 年度（現地調査・整理作業）
教 育 長	田中 明
管 理 部 長	國田 敦彦
社 会 教 育 課 長	砂田 宏司
社 会 教 育 課 副 課 長	三浦 執
歴 史 文 化 振 興 係 長	岩崎 晃彦（調査補助）
歴 史 文 化 振 興 係 主 任	渡邊 芳貴（調査・整理担当）

調査作業員：武田忠義・利根千代美・榎重信（50音順）

第 3 節 本郷 I 遺跡周辺の地理的環境

愛媛県西条市は、愛媛県の東部地域に位置し、北は燧灘に面する。南部は西日本最高峰の石鎚山を主峰とする石鎚山系、また西部は高縄山系の山々を背後に控え、それらの山系を水源とする河川により形成された県下第 2 の規模を誇る道前平野を有する。

四国地方の地質基盤は、ほぼ東西方向に帯状分布しており、周辺の地質は中央構造線により西南日本内帯と外帯に分けられている。平野部は主に内帯に位置する。なお、西部の高縄半島は、領家帯の花崗岩および変成岩類が基盤層として分布している。一方、南部は中央構造線の北側に沿って和泉層群が分布している。

今回調査を実施した周布地区は平野の北西部に位置し、遺跡は石鎚山系を水源とする中山川及びその支流により形成された扇状地上に存在する。

第 4 節 本郷 I 遺跡周辺の歴史的環境

本節では本郷 I 遺跡を取り巻く歴史的環境として、道前平野北部の遺跡の状況を述べていく（図 1 - 4）。

1 旧石器時代

本遺跡の所在する周布地区を含め道前平野北部では、旧石器時代の遺構・遺物は発見されていない。

2 縄文時代

最も古い人類の痕跡としては、早期の遺物が椎木遺跡 (22) や世田山麓遺跡 (20)、六軒家遺跡群 (17～19) など、平野北部でも北端に近い丘陵部で発見されている。また、遺構では、福成寺遺跡 (25) で検出された落とし穴と考えられる土坑が、この時期のものとなる可能性も指摘されている。しかし、続く前期の遺跡は現在のところ確認されておらず、中期に至っても世田山 VI 遺跡 (28) や六軒家遺跡群から遺物が出土しているのみで、安定した遺跡の広がりがみとめられるようになるのは後期

に入ってからである。後期の遺跡としては石風呂Ⅱ遺跡(27)、世田山遺跡群、椎木遺跡、松木池遺跡(21)などを挙げるができるが、依然として北部の丘陵部を中心とした分布を示す。晩期では、福成寺遺跡及び旦之上遺跡(26)で、土坑が検出されている。

3 弥生時代

弥生時代前期は、これまで明確な遺構が確認されておらず、観念寺池遺跡(31)、横田遺跡(5)、天神遺跡(34)等で遺物が出土しているのみであったが、近年の調査で遺構も確認されてきた。福成寺遺跡では住居跡が、成福寺Ⅷ遺跡(29)では土坑や溝が検出され、土坑からは有柄式と考えられる磨製石剣が出土している。しかし、これらの遺跡の分布は依然として、平野北部の丘陵を中心としたものである。

このような状況が中期には一変して、遺跡数が急増し、縄文時代以来の丘陵周辺部(椎木遺跡、天神遺跡、新池遺跡等)に加え、平野部でも遺跡が確認され始める。本郷Ⅰ遺跡の周辺に目を向けると、久枝Ⅱ遺跡(8・9)を中心とした大規模遺跡群の存在が際立つ。なお、久枝Ⅱ遺跡は、模倣・搬入土器や武器形石製品の存在、特定区画域の存在と居住域や祭祀領域の選定等の特殊性から当地域の中核遺跡と評価されている。

4 古墳時代

集落は、前期では久枝Ⅱ遺跡や本郷Ⅰ遺跡1次調査区(7)で住居跡が検出されている。中期には明確な遺構は確認されていないが、後期になると北部の長網Ⅰ・Ⅱ遺跡(23・24)や福成寺遺跡で大規模な遺構が出現する。また、今回調査地に南接する本郷Ⅰ遺跡2次調査区(6)や久枝遺跡(10)では、後期から古代にかけての遺構が検出されている。

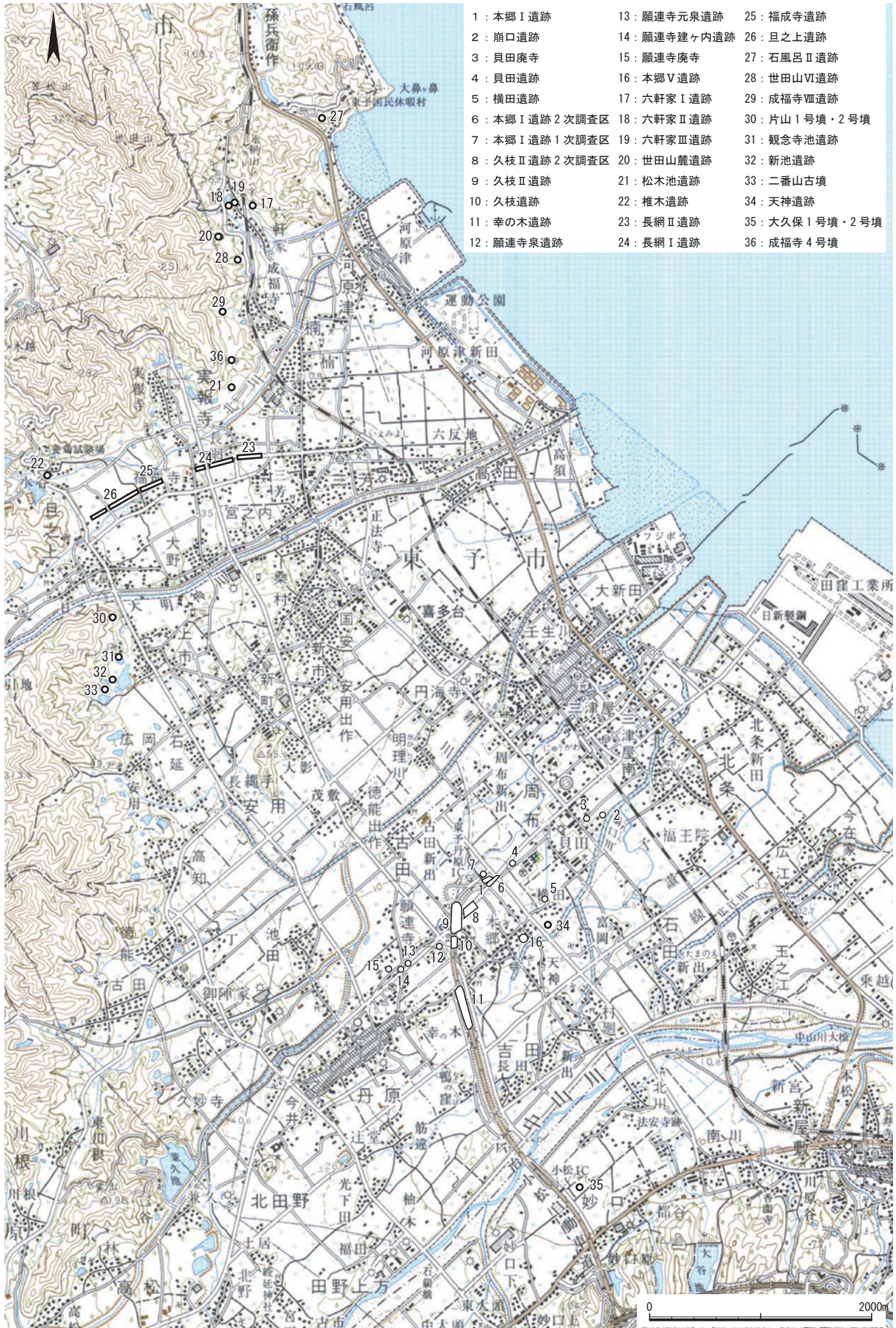
墳墓は、弥生時代後期終末～古墳時代初頭とされる成福寺4号墳(36)や、同じく出現期の前方後円墳と考えられる大久保1号墳と円墳の大久保2号墳(35)が確認されている。中期では、上市地域の丘陵部に片山古墳群(30)や二番山古墳(33)などが存在する。後期になると、北部の丘陵尾根を中心に多くの古墳群が営まれる。

5 古代

本郷Ⅰ遺跡周辺は、古代の「周敷郡」に属する。本遺跡の北西に位置する久枝Ⅱ遺跡の調査では、周敷郡衙関連施設の可能性がある遺構が検出されている。また、久枝遺跡に近接する幸の木遺跡(11)でも8～11世紀の遺物が多量に出土している。

6 中世

当平野を囲む山間部や丘陵部には、他地域同様に多くの中世山城が築かれている。また平野部でも、久枝遺跡や願連寺遺跡群(12～14)などで集落跡が確認されている。さらに本郷Ⅴ遺跡(16)では、中世の集落が確認されていて、当地域では貴重な例である井戸も検出されている¹⁾。



(この地図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図 (西条) を使用したものである。)

図 1 - 4 本郷 I 遺跡周辺の遺跡 (S=1/50000)

《参考文献》

- 東予市誌編纂委員会編 『東予市誌』 東予市 1987
- 柴田昌児他編 『幸の木遺跡』 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002
- 柴田昌児他編 『大久保遺跡・大久保1号墳』 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002
- 柴田昌児他編 『久枝遺跡 久枝Ⅱ遺跡 本郷Ⅰ遺跡』 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005
- 西川真美他編 『願連寺泉遺跡2次 願連寺元泉遺跡 願連寺建ヶ内遺跡』 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005
- 松村さを里他編 『世田山4号墳・成福寺Ⅷ遺跡・成福寺3・4号墳・松木池遺跡・長網Ⅰ遺跡2次』 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007

注1 本郷Ⅴ遺跡については、西条市教育委員会が平成20年度に実施し、現在整理作業中である。

第2章 調査成果

第1節 1区

本調査区は、北東 - 南西に長軸をもつ4×2mの調査区である。

(1) 層序 (図2 - 2)

現地は休耕田であり、現代の水田に伴う層（1層：耕作土、2層：床土層、3層：鉄分・マンガンの沈着層）が堆積していた。なお、2層中からは、須恵器片を含む若干の土器が出土している。4層は4～12cm程度の厚みで堆積するオリーブ褐色のキメ細かな粘質土層で、古墳時代後期の遺物を含む包含層である。5層は暗灰黄色の粘質土層であり、4層に比べさらにキメが細かい。遺構・遺物は検出されなかった。6層は、オリーブ褐色の強い粘質土層である。5層同様に遺構・遺物は確認されなかった。

(2) 遺構

本調査区では、遺構は確認されなかった。

(3) 遺物

遺物は、2層、4層から出土した。

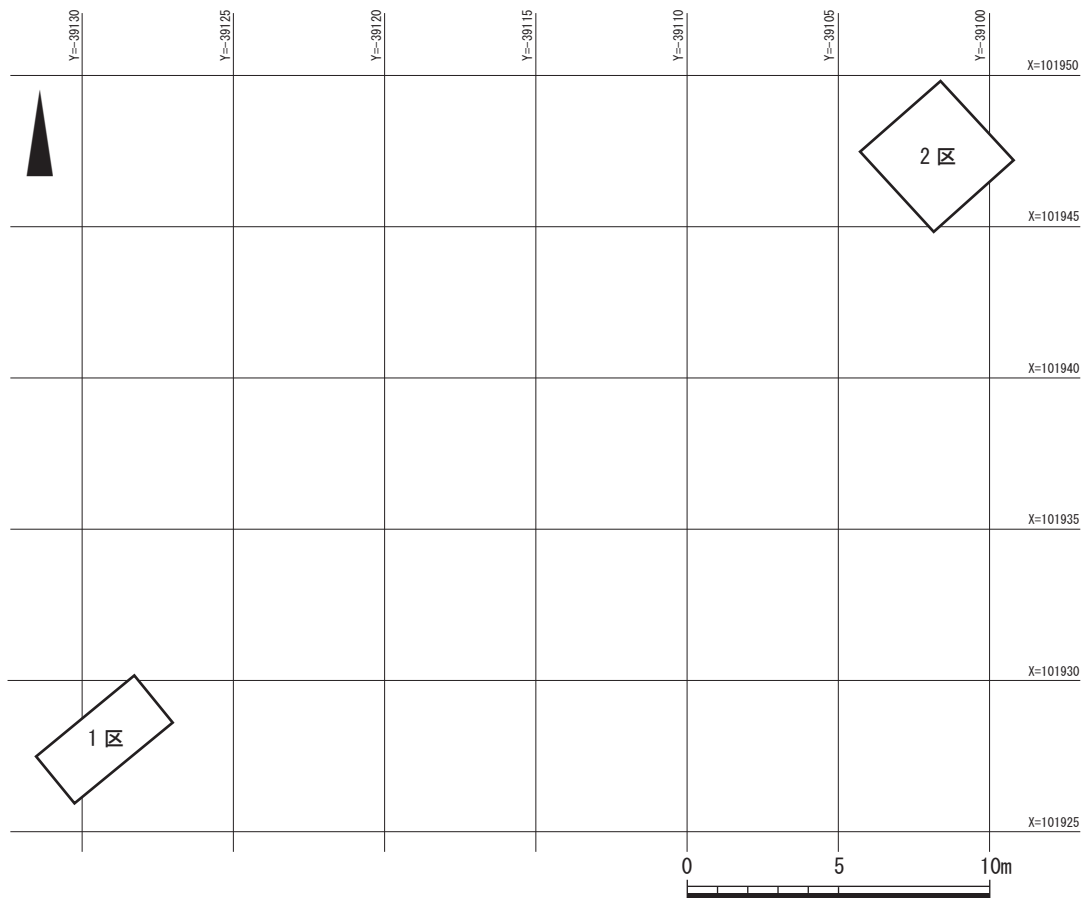


図2 - 1 調査区配置図 (S= 1/250)

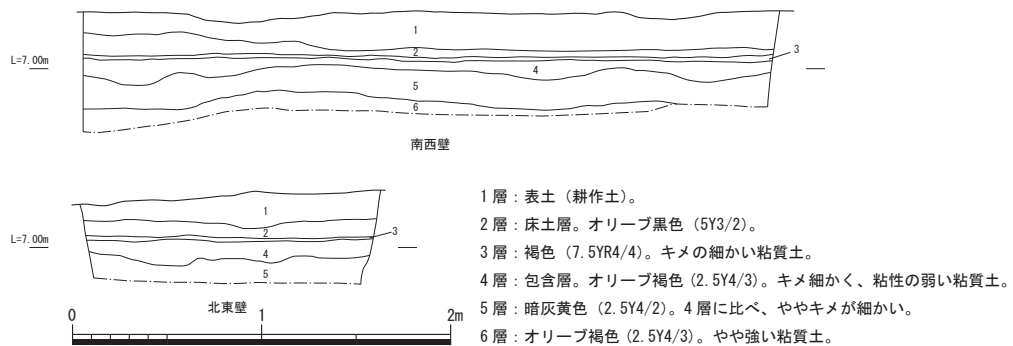
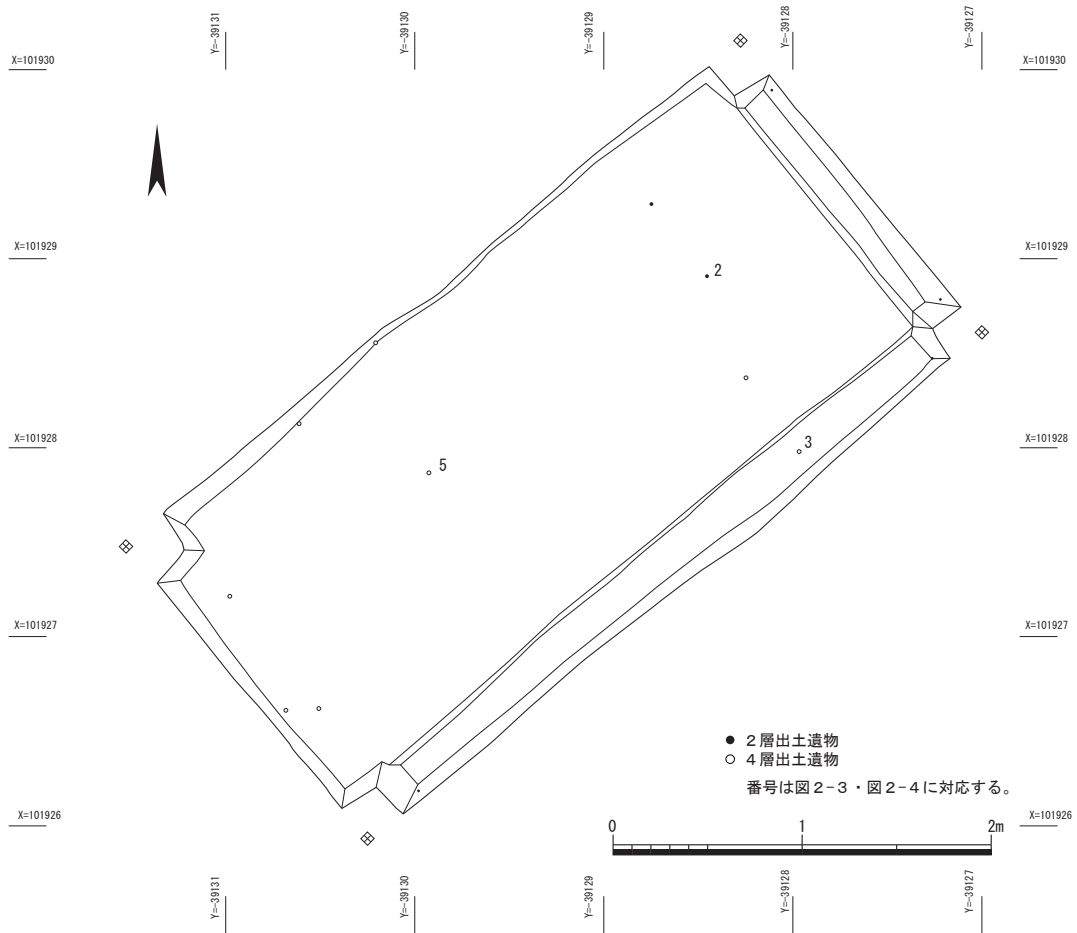


図2-2 1区平面・断面図 (S= 1/40)

2層出土遺物（図2-3 1・2）

2層は水田床土層であり、以下に述べる須恵器片の他に青磁片や器種・時期不明の陶磁器片が出土している。

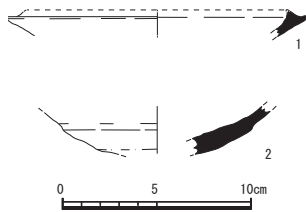


図2-3 1区2層出土遺物（S=1/4）

1は、須恵器坏身の受部から口縁立ち上がりにかけての破片である。口縁端部は欠損しているものの、残存状況から見ると、立ち上りは比較的短いものと考えられる。復元口径は13.8 cmを測る。2は、高坏の坏部片もしくは坏蓋片である。外面中位には段状の明確な稜がみとめられる。なお、上部は欠損している。

4層出土遺物（図2-4 3～5）

4層からは、土師器・須恵器及び鉄器片が出土している。

3は、土師器坏の口縁部片である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。時期は、古墳時代後期～古代と考えられる。

4・5は須恵器である。4は坏蓋の口縁部片で、口縁端部は先細りする。5は高坏の坏部片と考えられる。緩やかに外反し、口縁端部は先細りする。これらの時期は、古墳時代後期と考

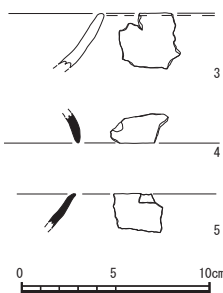


図2-4 1区4層出土遺物（S=1/4）

第2節 2区

本調査区は、北西 - 南東に軸をもつ3.6 × 3.6mの調査区である。

(1) 層序（図2-5）

1層は造成土で、約20～30 cmの厚さで堆積する。2層：旧耕作土、3層：旧床土、4層：鉄分・マンガン沈着層は、造成前の水田に伴う層である。

5層は黄褐色のきめ細かい粘質土で、本層中からは古代の須恵器片等が出土している。6層も黄褐色粘質土であるが、5層に比べさらにキメが細かい。本層中からも須恵器片等の遺物が出土している。7層は暗褐色粘質土層である。本層では、5基のピットを検出した。

(2) 遺構（図2-5）

7層検出面で、調査区北壁付近で5基のピットを検出した。これらのピットのうち4基（SP1～4）は平面円形で、直径20～25 cm程度とほぼ同一形態をなす。

一方、SP5は平面隅丸方形に近い不整円形を呈し、規模は26 × 30 cmを測る。また検出面からの深さもSP1～4が5 cm前後であるのに対し、SP5は15 cmと若干深い。

また、これらのピットは、SP1・2・4・5が60～70 cm間隔でほぼ直線的に並んでいるようにもみえる。掘立柱建物や柵列のような遺構となる可能性もあるが、詳細は不明である。

(3) 遺物

遺物は5層、6層及びピット内から出土している。

5層出土遺物（図2-6 6・7）

5層からは須恵器片、土師器片が出土しているが、その大半は小片のため詳細な時期は不明である。

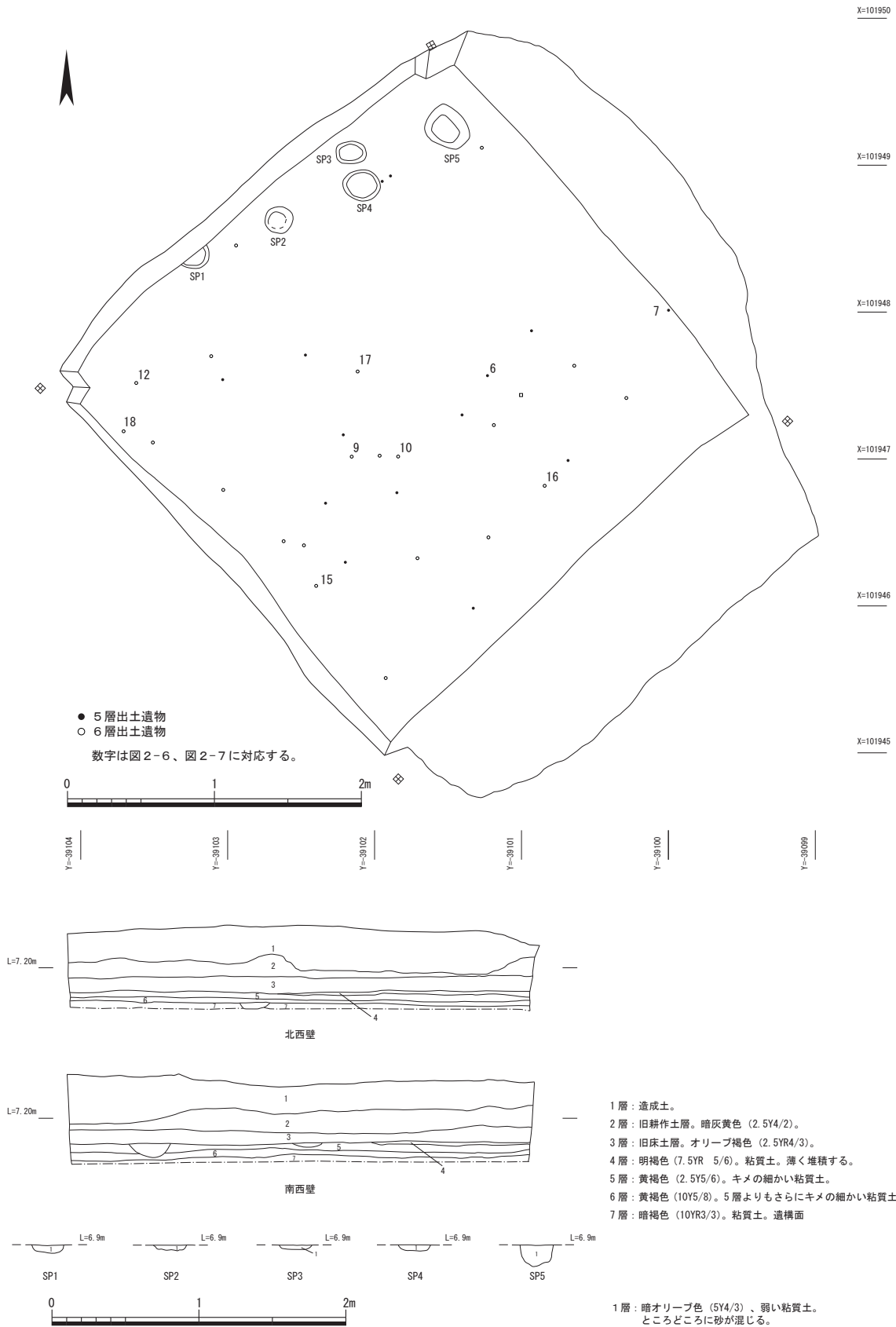


図2-5 2区平面・断面図 (S=1/40)

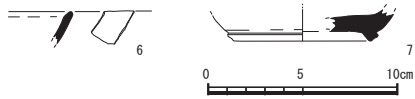


図 2 - 6 2 区 5 層出土遺物 (S=1/4)

このような中で図面化できた須恵器片 2 点については、その特徴から 8 世紀代のものと考えられる。

6 は、坏身口縁部片である。直線的に外傾し、口縁端部内面はわずかにくぼみ弱い段をなす。7 は高台を有する坏身底部片である。高台は底部と体部の境付近に位置し、高さは低い。

6 層出土遺物 (図 2 - 7 8 ~ 19)

6 層からは須恵器片、土師器片が出土しているが、小片が多く図化できたものは須恵器片のみである。なお、土師器には甕の破片などが含まれる。

8 ~ 10 は坏蓋片である。大きさは、比較的残存状況の良好な 8 で復元口径 15.0 cm を測る。口縁部と体部との境については、8・9 が明確な稜を有するのに対し、10 は稜を有さない。また、3 点共に口縁端部内面は緩やかにくぼみ、段をなす。このうち、10 は段が不明瞭で、少し退化している。

11 ~ 17 は坏身片である。口径を復元できる 11・12 で復元口径 13 cm 台であり、端部の欠損している 13・14 もほぼ同様となりそうである。一方で、15 は受部の径が復元で 12.6 cm とやや小振りである。口縁の立ち上りは、比較的長いもの (11・12・17) が主体となるが、15 のようにやや低く復元されるものも存在する。口縁端部については、端部が残存する 11・12 をみる限りでは、内面の段はみとめられない。

18 は、直線的に立ち上がる口縁部片である。器壁は 2 mm 前後と薄い。短頸壺の口縁部片の可能性が考えられる。

6 層出土遺物は、主に坏蓋・坏身の特徴から、6 世紀中葉～後半頃のものと考えられる。

ピット出土遺物 (図 2 - 7 19)

19 は、SP4 から出土した須恵器片であるが、器種は不明である。内面は発泡していることから、何らかの熱を受けた可能性が考えられる。なお、SP2、SP3 でも須恵器が出土しているが、小片のため図化できなかった。

第 3 節 試掘調査出土遺物

本節では、試掘調査で出土した遺物を報告する (図 2 - 8 20 ~ 26)。

試掘調査では須恵器を中心とした遺物が出土しており、そのうち代表的なものを図 2 - 8 に掲載している。

20 は、須恵器坏蓋片である。口縁端部は先細する。また口縁部と体部との境の稜はみとめられない。

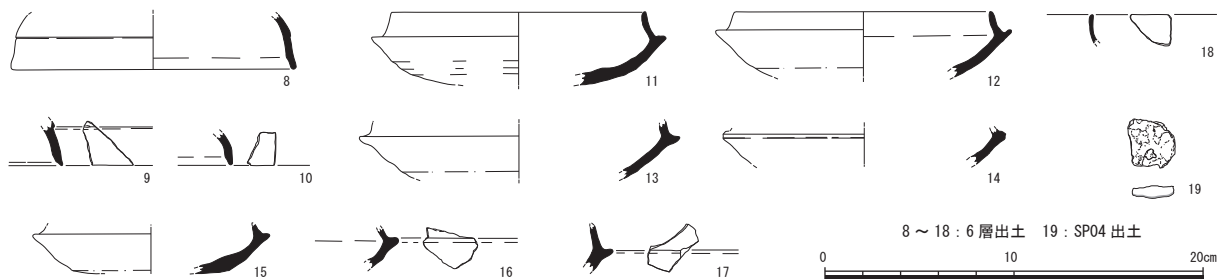


図 2 - 7 2 区 6 層及び SP4 出土遺物 (S=1/4)

21～23は、須恵器坏身片である。復元口径は22が13.8cm、23が12.6cmであるのに対し、21は11.6cmとやや小ぶりである。この違いは口縁立ち上がりの高さにもみとめられ、22・23に比べ21は高さが低い。

24～26は坏身の底部片と考えられるが、坏蓋の天井部となる可能性もある。外面には、回転ヘラ削りが施される。

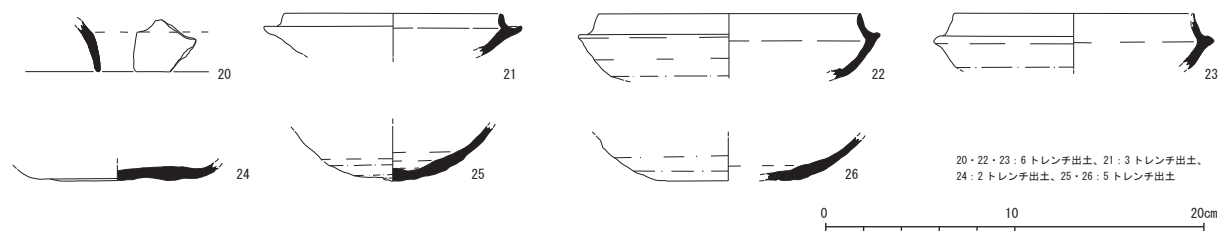


図2 - 8 試掘調査出土遺物 (S=1/4)

表 2 - 1 遺物観察表

図・番号	出土場所	種別	取上げ番号	器種	部位	法量 (cm)	色調	文様・調整・胎土等の特徴
図 2 - 3 - 1	1区2層	須恵器		坏身	口縁部～体部	口径 13.8 残高 1.3	外：灰色 (N6/ 内：灰白 (色 7/)	立ち上がり端部は欠損するが、さほど高くない。回転横ナデ。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 4 - 2	1区2層	須恵器	P1	高坏	坏部	残高 2.6	灰色 (7.5Y6/1)	外面に緩やかな段を有し、段下は回転ヘラ削り。
図 2 - 4 - 3	1区4層	土師器	P4	坏?	口縁部	残高 2.9	外：赤褐色 (2.5YR4/6) 内：明赤褐色 (2.5YR5/6)	内湾しながら立ち上がる口縁。端部は丸みをもつ。内外面ともに横ナデ。
図 2 - 4 - 4	1区4層	須恵器		坏蓋	口縁部	残高 1.6	外：暗灰色 (N3/ 内：灰白色 (N7/)	口縁端部は先細りする。内面の段はない。回転横ナデ。
図 2 - 4 - 5	1区4層	須恵器	P5	高坏	坏部	残高 1.7	外：灰色 (N6/ 内：灰色 (N4/)	端部は先細りする。内外面共に回転横ナデ。
図 2 - 6 - 6	2区5層	須恵器	P13	坏身	口縁部	残高：1.7	外：灰色 (5Y 5/1) 内：灰白色 (N7/)	直線的に外傾する口縁部片である。口縁部内面はわずかにくぼむ。
図 2 - 6 - 7	2区5層	須恵器	P11	坏身	底部	底径：11.2 残高：7.6	灰白色 (2.5Y 7/1)	高台付の坏身。高台は、低くやや外側に踏ん張った形態をなし、端部は緩やかにくぼんでいる。
図 2 - 7 - 8	2区6層	須恵器		坏蓋	口縁部～天井部	口径：15.0 残高：2.9	外：灰褐色 (5 Y R6/2) 内：褐灰色 (7.5YR5/1)	口縁部と体部の境には明確な稜をもつ。口縁部内面は緩やかな段をなす。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 9	2区6層	須恵器	P25	坏蓋	口縁部～体部	残高：2.3	灰色 (N6/)	口縁部と体部の境には明確な稜をもつ。口縁部内面は緩やかな段をなす。胎土には～2mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 10	2区6層	須恵器	P27	坏蓋	口縁部～体部	残高：1.7	灰色 (N6/)	口縁部内面は緩やかな段をなす。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 11	2区6層	須恵器		坏身	口縁部～体部	口径：13.4 残高：3.8	外：灰白色 (10 Y 7/1) 内：灰色 (N6/)	口縁立ち上がりは長く、端部は先細りする。体部外面は回転横ナデによる凹凸が目立つ。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 12	2区6層	須恵器	P16	坏身	口縁部～体部	口径：13.6 残高：3.4	灰色 (N6/)	口縁立ち上がりは長く、端部は先細りする。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 13	2区6層	須恵器		坏身	口縁部～体部	受部径：17.0 残高：2.9	外：灰白色 (N6/ 内：灰色 (N6/)	口縁部は欠損。胎土には～1mmの長石を含む。焼成はやや軟質。
図 2 - 7 - 14	2区6層	須恵器		坏身	口縁部～体部	受部径：15.0 残高：1.8	灰色 (N6/)	口縁部は欠損。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 15	2区6層	須恵器	P24	坏身	口縁部～底部	受部径：12.6 残高：2.5	灰色 (N6/)	口縁部は欠損しているが、立ち上がりは11・12に比べやや短くなるも、～2mmの長石を含む。底部外面は、不明瞭であるが回転ヘラ削り。
図 2 - 7 - 16	2区6層	須恵器	P31	坏身	受部～体部	残高：2.0	灰色 (N6/)	口縁部は欠損しているが、残存状況から立ち上がりの長さは短いものと考えられる。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 17	2区6層	須恵器	P21	坏身	口縁部～受部	残高：2.4	灰色 (N6/)	口縁部は欠損しているが、立ち上がりは比較的に長くなると思われる。胎土には～2mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 18	2区6層	須恵器	P18	短頸壺	口縁部	残高：1.6	灰色 (N6/)	若干内傾するもの、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部片である。器壁は厚さ2mm前後と薄い。胎土には～1mmの長石を含む。
図 2 - 7 - 19	2区SP4	須恵器		?	?	残存幅：2.3～ 2.5	外：オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 内：オリーブ黄色 (5Y6/3)	内面は発泡している。
図 2 - 8 - 20	6トレンチ	須恵器		坏蓋	口縁部	残高 2.6	灰色 (N6/)	端部はやや先細りする。回転横ナデ。
図 2 - 8 - 21	3トレンチ	須恵器		坏身	口縁部～体部	口径 11.6 残高 2.3	外：灰白色 (7.5Y7/1) 内：灰白色 (N7/)	立ち上がりは、22・23に比べ低い。口縁部は丸くおさまる。
図 2 - 8 - 22	6トレンチ	須恵器		坏身	口縁部～体部	口径 13.8 残高 3.5	灰色 (N6/)	受部は幅狭。口縁部はやや先細りする。
図 2 - 8 - 23	6トレンチ	須恵器		坏身	口縁部～体部	口径 12.6 残高 2.9	灰色 (N6/)	受部は幅狭。口縁部はやや先細りする。
図 2 - 8 - 24	2トレンチ	須恵器		坏身	底部	残高 0.9	灰白色 (N7/)	底面は回転ヘラ削り。
図 2 - 8 - 25	5トレンチ	須恵器		坏身	底部	残高 1.0	灰白色 (N7/)	丸みをもった底部 (天井部) には回転ヘラ削りが施される。坏蓋天井部となる可能性もあり。
図 2 - 8 - 26	5トレンチ	須恵器		坏身	底部	残高 2.3	外：赤灰色 (2.5YR6/1) 内：青灰色 (5PB5/1)	丸みをもった底部 (天井部) には回転ヘラ削りが施される。坏蓋天井部となる可能性もあり。

第3章 総括

本郷Ⅰ遺跡2次調査では、2つの調査区で調査を実施した。1・2区共に調査面積が小さかったものの、2区では5基のピットを検出し、このうち4基は直線的に並んでいた。詳細は不明であるが、何らかの建物あるいは柵列のような施設であった可能性も考えられる。また、遺構面直上の包含層からは、古墳時代後期中葉から後半にかけての土器片が出土している。先に実施した本郷Ⅰ遺跡1次調査でも、古墳時代後期の遺構・遺物を確認していることから、これらは一連の集落であった可能性も考えられる。

さらに2区では、5層から古代の須恵器片も出土した。本遺跡は、古代の郡衙と推定される久枝Ⅱ遺跡に近接した場所であり、古墳時代後期から古代まで継続して集落が営まれていた可能性もある。しかし、明確な遺構が確認されていないため、現段階ではあくまで可能性にとどめておきたい。

以上、今回の調査は小規模な範囲であったものの、これまで周囲の調査で把握されていた古墳時代後期の遺構と遺物、古代の遺物の存在を確認でき、本郷Ⅰ遺跡の範囲が従来の想定よりやや南側に広がることが明らかとなった。

また、遺跡自体は、事業者の協力もあり工事対象範囲の大部分で遺構に影響を与えない工法が採用されたことにより、未調査の状態で見地に保存することができた。

今後は、今回の調査成果を地域の共有財産として活かしていくと共に、周辺の文化財保護意識の啓発にも役立てていかねばならない。

写 真 图 版

1区 遺物検出状況（北東から）



1区 完掘状況（北東から）



1区 南東壁断面（北西から）





1区 北東壁断面（南西から）



2区 5層遺物検出状況（南東から）



2区 6層遺物検出状況（南東から）

2区 7層ピット検出状況（南東から）



2区 7層 SP2 半裁状況（南から）



2区 7層 SP3 半裁状況（南から）





2区 7層 SP4 半裁状況（南から）



2区 7層 SP5 半裁状況（南から）



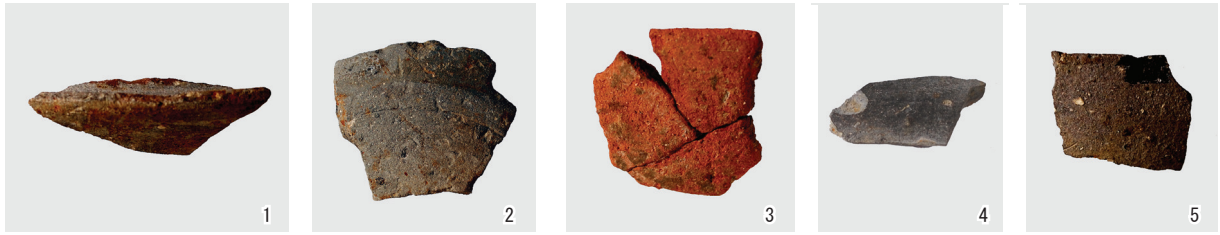
2区 7層完掘状況（南から）

2区 北西壁断面（南東から）



2区 南西壁断面（北東から）

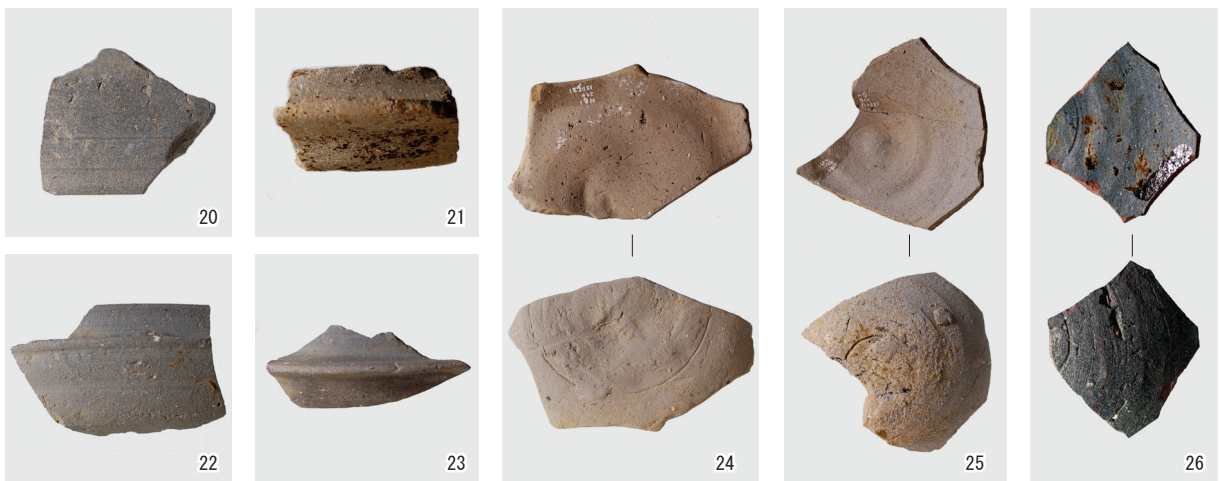




1区出土遺物



2区出土遺物



試掘調査出土遺物

縮尺不同

報 告 書 抄 録

フリガナ	ホンゴウ I イセキ 2 ジチョウサ							
書名	本郷 I 遺跡 2 次調査							
副書名	大規模商業施設建設に伴う事前発掘調査							
巻次								
シリーズ名	西条市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 12 集							
編著者名	渡邊 芳貴							
編集機関	西条市教育委員会							
所在地	〒 793 - 8601 愛媛県西条市明屋敷 164 番地 TEL (0897) 56 - 5151							
発行年月日	2013 年 3 月 29 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ' "	東経 ° / ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
ほんごう I いせき 本郷 I 遺跡	まひめけんさいじょうししゅう 愛媛県西条市周布	38206		33° 55' 06"	133° 04' 36"	20120718 ~ 20120719 20120910 ~ 20120912	21 m ²	開発に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
本郷 I 遺跡	集落	古墳時代後期	ピット	須恵器片、 土師器片				
要約	本郷 I 遺跡は弥生時代以降、道前平野の中心となる周布地区に位置する。今回の調査は小規模であったため、性格の明らかな遺構は検出できなかったが、5 基のピットや古墳時代後期の須恵器片等を検出した。							

この報告書は、電子版のみ刊行しています。

西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集

本郷 I 遺跡 2 次調査

—大規模商業施設建設に伴う事前確認調査—

2013 年（平成 25 年）3 月 29 日

発行 西条市教育委員会

愛媛県西条市明屋敷 164 番地